保元物語
平治物語
平家物語

校註

日本文學大系

第十四卷

大正十四年八月二十日印刷
大正十四年八月二十三日發行

日本文學大系
第十四卷

（非賣品）

編輯兼發行者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座二一八八八番　七八三番
振替東京五二二九八番

解題

保元物語

文學博士　尾上八郎

平安朝時代の末から鎌倉幕府時代の初にかけて、統一的傾向が昌んに起つた。それは政治上、社會上、思想上、いづれにもあると共に文學上にもあつた。變體ながら武家政治が完成し、鎌倉幕府の威令が、北の端から南の果まで行き渡り、頼朝の統一事業が成就する一方、全く別であつた公卿と武家との二階級が混同した。從つて、公卿の都と、武士の田舍とは一緒になつた。公卿道と武士道とが、一つに見えて來た。神道と、儒道と、佛道とが混合して現はれた。都會語と田舍語とが雜揉した。男子の專有であつた漢詩文と、女子の主とした國文とが一となつた。散文と韻文とが混融して來た。こゝに基礎を置いて鎌倉幕府時代に現はれた新文學は、全日本國民を代表する文學である。而して、その主なるものの名が軍記物語であり、保元、平治、平家の諸物語

は、その初出のものである。

泰平無事、花も月もたぐひなき光を投げてゐた平安城の天地も、院政の頃になると、陰雲がたなびき、悲雨が降りはじめ、劍戟の光が、電のやうにひらめき渡つた。保元元年間に於ける動亂は、その始である。

藤原氏の盛も、後三條天皇の頃から衰へはじめた。賴通以後、實力は漸次に失はれて、攝關の位置は、餘り多くの價を有しなくなつた。しかし、殘存した威力は、外面的には、まだ極めてきららかで、藤原氏と云へば猶尊敬の標的となつてゐた。この藤原氏に内爭のあつたのは、屢々であつた。その中で最も大きかつたのは道長對伊周のそれであつた。道長の英俊を以てして、小膽ながら根柢のある伊周を仆すには、時間がかゝつた。この後は平穩無事で、富家殿乃ち忠實に到つた。忠實に二男子がある、長が忠通、次が賴長である。忠通は長子であるから關白となつたのであるが、父とは合はなかつた。この人は詩歌に巧みで、手跡が美しく、いはゆる法性寺樣の始祖となつた程である上に、この物語にある如く、「よろづなだらかにおはしまして、皆人に褒められ」てゐたのであつた。賴長は左大臣になつたが、極めて父に愛せられてゐた。この人は、和漢の才に富んで、愚管抄に「日本第一大學生」といはれた程であり、その上に萬事敏捷で、果斷で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

且つ容貌も立派であつた。詩歌、手跡は閑事業に過ぎぬ、朝家の要事ではない。故に賢臣の好むべきではないと、兄を非難し、政務を大事にし、嚴しく善惡を糾してゐた。父はこの人を愛するあまりに、忠通から氏長者を取り返して、朱器臺盤を賴長に渡してしまつた。忠通は憤つて、父とも、賴長とも絶交の有樣になつた。この内爭は日にまし紛糾して、いつしか、何等かの形を以て、外面的にならうとしてゐた。

後三條天皇が藤原氏に壓迫を加へ、皇室の威權を盛にせられてから、白河天皇が院政を始められて、鳥羽天皇に到つた。天皇は保安四年に御退位になり、崇德天皇が續いて御立ちになつた。しかし、政治は猶院自からせられてゐて、天下は太平であつた。ところが、保延五年に、上皇の寵姫の美福門院の御腹に、皇子が御出生になつた。院は大喜びで、早速東宮に立てられた。而して永治元年に三歲で卽位せしめられた。これが乃ち、近衞天皇である。それで鳥羽院を一院、崇德院を新院と申し奉つた。新院は、心ならず位を御下りになつたので、甚だ御不快で、父子の御中もよからずなつた。その中、當帝は久壽二年に崩御せられた。

新院は天皇の崩御によつて、重祚するか、或は皇子の重仁親王が卽位されるかと待受けて居られたが、意外にも、美福門院の御扱ひで、打ちこめられておはしました四の宮が、御卽位になつ

た。これが乃ち後白河天皇である。これも近衞天皇の御早世は、新院の呪詛によると思はれたからである。で、新院は御憤に堪へずいらせられる。こゝに出入したのが頼長である。かくて、保元元年六月になると、一院は御かくれになつた。頼長は、「重仁親王を位に卽け奉りて、天下をわが思ふまゝに、とり行はばや。」と思ひ、新院も、「舊院登遐の後は、われ天下を奪はんこと、何の憚かあるべき。」と思召されたので、こゝに藤原氏の内爭と、皇室の内紛とが、結合することとなり、父子、兄弟、叔姪相鬪ひ、相殺す悲慘な戰爭が勃發したのであつた。

以上の樣子は、早くも世に知れた。天皇の方でも、武士を召された。召に應じたものは、源義朝、平淸盛等である。新院の方でも、同じく武士を召された。應じたものは平忠正、源爲義等である。爲義は、天皇からも召されて猶豫して居るところを、敎長に巧みに說得せられて、つひに義朝以外の子どもを率ゐて新院の方に參つた。その中に、爲朝がある。これらが、白河殿の諸方の門を堅める。先んずる時は人を制すと云ふので、義朝等は夜討を懸ける。時は七月十一日である。戰は暗中に起つた。しかも極めて激烈であつた。しかし多勢に對して無勢であるのと、猛火の盛んにおほひかゝるのとで、爲義等は支へ得なかつた。頼長は流矢に中つて、十四日にはかなく薨じた。新院は如意山に逃げられたが、轉じて仁和寺に入られた。爲義は、東國に下らうとし

て病を得、止むなく叡山で出家し、子の義朝によつて降參した。清盛の叔父の忠正も降參した。清盛は忠正を斬つたので、義朝も爲義を殺さなければならなかつた。重仁親王は出家せられ、新院は讃岐に流され、そこで御かくれになつた。忠實は南都に走つて計畫してゐたので、配流せられんとしたが、忠通の願によつて許された。このために、父子の間が融和した。功によつて義朝は左馬頭、清盛は播磨守となつた。爲朝は伊豆の大島に流されたが、これも後に誅伐せられた。これで、この一亂の始末もついたが、藤原氏の內情と無力とは遺憾なく暴露せられ、その紛糾の解決も、武士の力を借らねばならぬ事が明らかになり、源平二氏の勢は急に增加するに到つた。

この物語は、かく保元一亂の始末を書いたものであるが、その主としてゐる處は、皇室でも藤原氏でもなく、源平二氏の武士の奮戰健鬪の狀である、これを寫さうとして、まづその然るべき所以を書いた。また餘波として結末を描いた。戰鬪の時間は極めて短い。しかも、それの描寫が全體の眼目である。その中心となつてゐるものは、一方には義朝であり、他方には爲朝である。爲朝は爲義に隷屬した一部將で、一方の主將たる義朝と對應すべくはないのであるが、九州在住以來、人氣の多かつた事は非常で、初參の時、院を始めてあらゆる人々が、「音に聞ゆる爲朝見んとて、こぞり給ふ。」といふ勢であつた。殊に古今無雙の弓の名人であつたので、義朝よりも、こ

の方が眞の中心となつてゐる。兄義朝の兜の星を射削つて、寶莊嚴院の方立に大矢を留めたり、配流せられても落膽せず、公家から賜はつたといつて、島々を討ち從へて、島王となつて居る氣持などは、英雄兒の風貌が奕々として、甚だ痛快である。義朝は爲朝ほどの活動をしてゐない。夜討燒討を決行するなど、敏活であるが、清盛に計られて父を殺すなど、極めて單純な頭の持主に過ぎぬ。清盛は、まだ中心人物とはなつてゐない。たゞ臆病で武畧を缺き、しかも陰險で、武士らしからぬ人間として現はされてゐる。かく樣々ではあるが、作者の同情は、概して源氏の方面にある。この書の製作の、源氏一統の後であることは、これのみでも明らかである。

この書は要領のよい書方をしてある。主要な物語に一貫したところがあつて、枝葉の事項が殆んどない。無鹽君の事などはあるが、それだけで、それ以上に進んでゐない。大體、事件が簡單であり、範圍が狹少であるが、無駄なく書きこなすのは、優秀の技倆を要する事と思ふ。語句にも雜駁なところもあるが、大抵よく精練せられて、流暢、優雅、雄勁、簡朴、ところに應じ、事によつて、自由自在に表現してゐる。和漢混淆文は、主として四六駢儷文から脫化したのであるから、對句の續出するのは自然であるが、壯重謹嚴なるべきところ、情緒纏綿たるべきところには、特に多くを用ゐてゐる。「法皇崩御の事。」「將軍塚鳴動の事。」等が、よくこれを證してゐる。

しかし、過ぎて厭味を起すまでには到つてゐない。韻文素が混入して來たために、七五調もあらはれて、「爲義降參の事」の終の如きは巧妙で、後の道行文の源をなしてゐる。

卷中には、多くの儒教思想を含んでゐる。論語、孝經を引いて、忠孝の大道を說いてあるのや、左傳、詩經を本として后妃の上を記してあるのは、皆それである。神祇の崇敬は頗る盛んで、熊野權現の御託宣で、天下の亂を知つたり、神事に疎であつて、大臣が慘死したりするのは、またそれである。が、是等を過ぎて盛んなものは、佛教思想である。前世の宿業によつて大臣の非業の死があり、過去の業因で武士が現在の惡身を受けたりする類は、所々に現はれてゐる。しかし武士は戰鬪するのが本體であるから、佛教の殺生戒とは齟齬するところがある。故にこゝに作者は、妥協點を見出してそれを說明してゐる。それは、爲朝をして「爲朝合戰すること二十餘度、人命を斷つこと數知らず。されども、分の敵を擊つて、非分のものを擊たず。鹿を殺さず。鱗を漁らず。」と云はせて居る。また同人に「一心に地藏菩薩を念じ奉ること二十餘年なり。」とも云はせてゐる。乃ち非分のものを殺さず、狩獵をせずして、一心に佛を念ずれば、武士としては、それで十分である。かく云はなくては、武士の主動者となつた時代の宗教は、成立しなくなるのである。

この書には異本がある。參考保元物語に、京師本、杉原本、鎌倉本、半井本、岡崎本を擧げてある。この中、岡崎本以外のものは、流布本と大いに異なつてゐる。爲朝の退口の如き、爲義降參の條の如きは、その著しいものである。爲朝が、爲義を奉じて關東に下向し、この戰爭に參加しなかつた武士を呼び集め、鎌倉に都を立てて、爲義を法親王とし、百官を置き、諸道を兄弟で差塞いだならば、何人か寄せられようぞ。將門が、下總相馬に都を建てて、平親王と號したのと決して劣りはしまいと、爲義に說いてゐるのは、驚くべき事實である。これによると、爲朝に對する同情も大いに失はれる心地がするが、この事は流布本には全くない。後の加筆の痕が歷々として徵せられる。吾人は故藤岡作太郎先生とともに、流布本を信用しようと思ふ。

この書の著作は、何時頃であるか。治承元年七月に、新院に崇德院の追號があり、八月に、賴長に、太政大臣正一位を贈られた事が書いてあるから、治承以後の製作たる事は明らかである。が、その後どの位までの範圍にあるべきか詳かでない。野村八良氏は、愚管抄を引いて、その書の終筆の貞應三年までは製作されてゐなかつたのであらうと云はれてゐるが、猶研究を要する事であらう。作者もまた不明である。從來は、第一に葉室時長と云ふ。それは醍醐雜抄に、「或平家双紙奥書云、當時命世之盲法師了義坊實名如一之說云、平家物語、中山中納言顯時子息左衞門佐盛隆

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

其子民部權少輔時長作之。又將門、保元、平治、己上四部同人作云々。」とあるのに據る。次に、中原師梁とも云ふ。それは、參考保元物語凡例に、「大外記中原師香所手書、上保元物語狀云。故師梁所鈔、師香乃師梁子也。」とあるのに據る。次にまた、源喩僧正ともいふ。それは安齋隨筆に引いた旅宿問答に、「或說には、多武峯に源喩僧正とて、有才有智の貴僧おはします。此の僧正保元、平治、源義賢、源義平一亂を作出したまふ。」とあるのに據る。尤もこの源喩は、新古事談には、公喩ともある。最初の平家物語と將門、保元、平治と同人の作といふ事は、到底肯定せられない。それは文體の相違は云ふまでもなく、人物でも、保元物語にある淸盛と、平家物語に出る淸盛と、全然性格を異にしてゐる如き、同人の作たることを否定するに十分である。しかし、この作者が時長か否かは、他の確證が出ぬ限りは、疑問としなければならぬ。次の中原師梁といふのは、故星野恆先生が、師梁は、「嘉曆元年ニ早世シ、時長ヲ去ル百餘年ノ後ニアレバ、其本書著撰ノ人ニ非ルハ論ナシ。」といはれてゐる。時長は疑問としても、嘉曆は後醍醐天皇の時代であるから、師梁は餘り遲い感がある。次の源喩僧正(或は公喩)といふのも、他の確證がなければ、斷言出來ない、師梁說と共に疑ふべきものである。畢竟、今日この作者は、判明し難いといふより外はないのである。

平治物語

皇室の内紛、藤原氏の内爭によつて、地方的には勢力を有しても、まだ公卿政治の下に、雌伏してゐた源平二氏の武士は、保元の一亂によつて、俄然擡頭して、中央の舞臺を闊歩するに到つた。その一方の頭目は、平清盛であり、他方の主領は源義朝である。この兩者は、竝び立つべく餘りに強かつた。機會があらば、相戰ひ、相仆さうと覗つてゐた。ところが、こゝに藤原信頼があらはれて、この兩者爭鬪の機會をつくつた。信頼は、後白河上皇に寵があつて、云ふ處が聽かれてゐたものだから、大臣大將になりたいと希望した。すると、この反對に立つたものがある。それは、入道信西である。後白河院の御乳母紀伊二位の夫であるので、威權があつたから、自づから信頼と衝突した。信西があつては、本意が遂げられさうにないので、信頼は、義朝と同盟した。これに反して信西は清盛と結託した。平治元年十二月四日に、清盛は子の重盛とともに熊野詣をした。この隙こそ幸である。信頼、義朝は蹶起した。九日の夜、院の御所三條殿に押し寄せて火をかけた。院も、主上も、内裏へ入れ進らせて、幽閉し奉つた。信西は天文によつて、危き

を知つて宇治田原に隱れたが、探し出されて殺された。信賴は、希望通りに右衞門督に大臣大將を兼ね、義朝を播磨守とした。六波羅の急使は紀州へ飛んだ。十日の曉に、清盛は都の大變を知つて所置を評議したが、重盛の勸めに從つて事なく六波羅に歸り入つた　間を得て、內裏から主上は六波羅へ、院は仁和寺に逃れ出でられた。清盛は大いに力を得て、遂に二十七日に內裏へ攻め寄せることとなつた。しかし清盛は止まつて皇居を守り、重盛、賴盛以下の人々が向ふ。重盛は、待賢門で信賴を擊破してまづ入る。義朝の子義平が迎へて戰ひ、それを擊破して、更に強烈な追擊をする。賴盛は、郁芳門に向つたが、義朝が居たので破られる。苦しい退卻をして重盛と共に六波羅に歸ると、源氏の連中は內裏を空にして、何處までもと追つて出る。平氏の別働隊はそれを窺つて入れ違に內裏を取る。源氏は歸るに處なくして、六波羅に押し寄せて、力の限り戰ふ。併し續く勢がないので、遂に擊破せられて、北に向つて遁走する。信賴は逃げ後れて、仁和寺に行き、後に殺される。義朝は近江に出で、尾張に逃げ、野間の內海に到つて、長田父子に殺される。義平は立歸つて屢々清盛を狙ふが、捕はれて斬られる。義朝の子の賴朝も捕はれたが、池の禪尼の御蔭で斬られず、伊豆に流される。義朝の他の子の常盤の出は、母が清盛に寵されたので死を免れる。その中の鞍馬に居た牛若が、便を得て奧州に下る。賴朝が兵を擧げるので、出

て來て一所になる。頼朝は池の禪尼の子の頼盛以外の平家の人々を殲滅して、意外の成功をし、長田父子をも誅戮して父の仇を報じ、また昔好意を示してくれた人々に、それ〴〵の報をする。

以上の記事は、この書に、まことに精細に書いてある。が、平治の戰鬪を主としたものとしては、あまりに長きに失する。從つて後の方はたゞ乾燥な記事となつてしまつた感がある。義平の死、頼朝の遠流位で止めて、簡單にこの始末をつけたならば、餘韻嫋々たるところがあつたであらうにと遺憾な心持がする。

かく長きに失するとともに、幾多の人物が現はれて來て、中核を逸せしめる傾があるが、主要人物は、一方は清盛及び重盛で、他方は義朝及び義平である。信頼、信西は、殆んどこの兩者を現はす楔子となるのみである。義朝の、武強一方で遠慮のない事は、猶保元物語にある如くであるが、清盛は、それよりも深謀のある如く描かれてゐて、陰險らしいところはなくなつてゐる。重盛は、清盛に越えて、智もあり、畧もある、立派な若武者であり、義平は、不撓不屈の勇氣に滿ちて、その父を若くした如き荒武者である。その兩者の戰鬪は、この卷中の花である。大庭の椋の樹を中にして、櫻橘を七八度も驅けまはる大活動は、讀者の血を湧かすべく、作者の作爲したものであらうが、痛快であり壯烈である。故に更に限局して云へば、中心人物は清盛でなく、

義朝でなく、重盛であり、義平である。しかし作者は、猶源氏に黨したものと見えて、別働隊で内裏を取る清盛の戰畧の巧妙なのを云はず、牽制隊に牽かれて、重盛、頼盛を急激に追ひかける源氏の武勇を推賞してゐる。勿論、義平の頼政を擊破して、卻つて敵の勢を增さしめた淺量を非難してはあるが、大體源氏の態度は著しく賞讃してある。これのみでも、源氏一統の世となつてから書いた事、保元物語の如くであるのを立證してゐる。

戰鬪中の中心人物ではないが、頼朝に關しては大いに述べてある。大庭の勢汰の時に、六波羅に逆寄しようと云つたのを賞讃して、「鳳凰は卵中にして超境の勢あり、龍の子は小さしといへども能く雨を降らす。」と評したのから始め、逃走、俘虜、遠流等を列記し、夢に打鮑を六十六本兩手に押握つて、太い所を三口食べたのは、「六十六箇國を打召され候はんずる。」といふ夢合をも記し、終に、その成功、その薨去などに及んで詳細に述べてゐる。之も源氏に左袒すること甚しいのを示してゐる。これらの中には、後の增補もあるであらうが、すべて、源氏贔屓であるのは明瞭である。これに反して、極めて惡しく醜く書かれてあるのは信頼である。臆病、無策、緩怠、放肆などの惡德は、皆この人に投げかけてある。いはゆる「日本一の不覺人」はこの人である。院の御信任をも得、識者の信西とも抗爭し、かほどの大事を思ひ立つた人であるから、常人に超

えたところもあつたであらうに、かく低劣にのみ書かれたのは、誠に氣の毒である。これらは、一方の義朝、義平に反襯せしめむがために、恰も平家物語の宗盛の如くに、故意に事實以下に書き下したのであらう。史實として信ずる人もあるまいけれども、注意すべき事と思ふ。

この書中にある思想も、保元物語と大差はない。佛教思想の見えるのも同樣であるが、特に尊王的精神の歴々たるは「光賴卿參內」にある。光賴が敵人充滿の間を悠然と通つて、大義名分を堂々と述べ立てて、逆臣の膽を寒からしめるのは、痛快至極である。光賴は保元物語でも、すでに「日本は神國なり。」と喝破して神祇尊崇の事を述べてゐるが、こゝでまたこの事のあるのは、作者の嚴肅な思想の發露であらう。この嚴肅なのと反對に、滑稽的、可笑的趣味の多いのは、この書の特色で、保元物語と違つてゐるところである。その滑稽的、可笑的なのは、人を多く殺したものに官加階あらば、三條殿の井こそ第一なれといひ、光賴に壓せられて信賴の臆したのを見て、光賴は賴光に通じるから大剛である。信賴は賴信の反對であるのに何故に臆病かといひ、阿波から歸京した經宗を阿波の大臣と云つたのを嘲つて、昔は黍大臣があつたが、今は粟大臣が出來たと云つた類で、その他の落首とともに珍らしいものである。この風は平家物語にも少なからずある。保元、平治の兩物語の作者は、平家とは別に同人であると思はれるが、これによつて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.